様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１９日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18760484
研究課題名（和文）　サンボー・プレイ・クック遺跡群の建築・都市研究

研究課題名（英文）　Study on the architecture and urban plan of Sambor Prei Kuk monuments

研究代表者
下田　一太（SHIMODA, Ichita）
早稲田大学・理工学術院・講師
研究者番号：40386719

研究成果の概要：
今日のカンボジアを中心として西暦 7 世紀を中心として隆盛を極めたプレアンコール期の首都イーシャナプラ（現在のサンボー・プレイ・クック遺跡）の古代都市と寺院に関する研究を行った。多数の寺院の他に水路や環壕，土手，古道といった土木的な痕跡が残されている古代都市の全体像を明らかにするとともに，遺跡群内で最大規模の寺院の歴史的な変遷の過程を考古学的な発掘調査により解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,600,000	0	1,600,000
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	330,000	3,730,000

研究分野：クメール建築史
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠（人文社会科学）
キーワード：クメール，アンコール，イーシャナプラ，サンボー・プレイ・クック，カンボジア

１．研究開始当初の背景

東南アジアにおける最も壮麗な遺跡群の一つであるアンコールは，9 世紀にこの王朝が成立する以前の, 扶南および真臘というプレアンコール期の建築文化を素地に成立している。中でもその大半が 7 世紀に造営されたといわれるサンボー・プレイ・クック遺跡群, つまり漢籍史料および碑文史料に記されるところのイーシャナプラに比定されるこの遺跡群が果たした役割は大きく, その規模と良好な残存状況より, 当時の都市および建築水準の高さを示した最重要の痕跡として注目されてきた。

本研究代表者は 1998 年より当遺跡群の調査を進めている。これまでの調査では主に, 遺跡群の全容を明らかにすることと, 全遺構の細部にわたる記録を目的に調査を実施してきた。航空写真および衛星写真により，これまで遺跡群として認識されていた地区の西側に 2km 四方の矩形の環濠に囲まれた地区が認められ, その内外から多数の煉瓦造祠堂，古代の土木工作跡，そして往時の田圃や溜池跡といった遺構が発見されていた。煉瓦造祠堂に限っても, 約 10km 四方の範囲より 200 基以上の遺構がそれまでの調査により記録されており, それら全遺構の目録化が進められていた。

また，2001 年からは，当遺跡群内の複合寺院であるプラサート・サンボー伽藍において発掘調査を進めていた。4 次に及ぶ発掘調査の結果, これまで厚い堆積土に覆われていた伽藍の原型が徐々に明らかになりつつあった。この他，幾つかの遺構からは複数回に及ぶ増改築の痕跡が検出され, 主要な寺院区においても後年に宗教的な再興の時期があったことが明らかになり, その史的背景の解明に期待が寄せられていた。

２．研究の目的

本研究は「サンボー・プレイ・クック遺跡群の全容解明」と「プラサート・サンボーを中心とした複合寺院の原型の解明」が目的である。

３．研究の方法

「サンボー・プレイ・クック遺跡群の全容解明」に対しては地形学的手法と考古学的手法をもってアプローチするものである。空中写真の解読と踏査に基づき, 広域に及ぶ古代の小区画痕および古道や水路の分布を検出し，都市の領域，形態について分析する。また, イーシャナプラの都城に比定されている環濠内の区画においては，表採調査，ボーリング調査，試掘を実施し，今後の本格的な発掘調査に備えた予備調査を進めた。

一方,「プラサート・サンボーを中心とした複合寺院の原型の解明」は建築学的手法および考古学的発掘調査によるものであり, 伽藍内外のクリアランスと発掘調査を継続する他, 祠堂や遺物の配置から往時の神格の分布，つまり寺院の宗教的性格の検証を図り，また今後の伽藍の整備計画に資する調査とした。

４．研究成果

遺跡群全体の構造に関する主な研究は，以下の具体的な課題に取り組んだ。

(1) 遺跡群全体において組積造による寺院遺構および土木的な痕跡をできるかぎり記録する調査。この調査は，遺跡群全域において一通りの踏査が終了し，仮の遺構目録の作成を完了した。現在，英訳版の推敲を進めており，近く報告を予定している。

(2) 都城にから延びる古道の追跡調査。空中写真と現場踏査にもとづく調査により，イーシャナプラに発する古道はアンコール遺跡群西域に連結していることが明かとなった。また，これまでに考えられてきたような，12 世紀末，ジャヤヴァルマン七世によって再整備された王道のうちの南東に延びる幹線道路は，イーシャナ

プラではなく，プラサート・アンデット寺院まで延びていることが確認された。調査の詳細は，後述の雑誌論文①を参照されたい。

(3) カンボジアとラオスに残存するイーシャナプラと同時代の主要な都城址の現場の調査ならびに既往文献の整理をおこない，それらの知見をまとめ，イーシャナプラの都城における特質を抽出することを試みた。調査の詳細は，後述の雑誌論文⑤を参照されたい。

(4) 都城イーシャナプラ内外での発掘調査。都城の西方の微高地チェイ，M45 遺構，M49 遺構の計 3 箇所で考古学的発掘調査を行った。チェイ村での発掘調査については嶋本紗枝「カンボジア・チェイ村における発掘調査と出土土器について」，東南アジア考古学 27 号，に詳しいので参照されたい。M45 遺構での発掘調査は都城付近での地下文化層についての確認を目的とするものであった。現在，報告をまとめている。M49 遺構での発掘調査は，遺跡群北側のローバン・ロミアス寺院群へのアクセス路上に位置する寺院遺構の調査で，調査により寺院は周壁を有し，複数の遺構がその境内に配されていることが明かとなった。これについても，報告をまとめているところである。

(5) 都城イーシャナプラ内での表採調査。将来的な都城内での発掘調査に備えて，地表面上での遺物の採取調査を行った。また，近年掘り下げられた井戸の分布や，井戸側壁の記録，都城内の家屋の分布や住民への聞き込み調査などを実施した。

(6) 都城内とその近傍に位置する寺院区での利用状況の比較を目的として，寺院区中央での発掘調査を実施した。この地区は過去にB.P.グロリエによって発掘調査が行われたことがあるが，その調査時の結果は未報告であった。未報告資料を確認するために，遺物の保管されているプノンペン博物館において，2 度の遺物記録・分析調査を行った。プノンペン博物館での調査結果の詳細は，嶋本紗枝，山本信夫，中川武，サンボー・プレイ・クック遺跡群出土土器・陶磁器の年代についての考察－B．P．グロリエによる発掘調査出土遺物を資料として－，東南アジア考古学 28 号，に詳しいので参照されたい。

プラサート・サンボーを中心とした複合寺院の研究では，以下の調査を実施した。

(7) プラサート・サンボー内，主軸上東側での発掘調査(2006年)。この発掘調査により，いくつかの改変の痕跡が認められ，7 世紀に当寺院が建立された後にも，複数回に及ぶ改変が繰り返された様子が明らかとなった。出土した遺構の上下関係や，施工精度の経時的な低下といった根拠にもとづき考察するならば，以下に示す伽藍の推移が推定される。

① 周壁を嵩上げする第一回目の改変＋外周壁東中央の階段状テラスの構築
② 中周壁を嵩上げする第二回目の改変
③ 内－中周壁間の参道下層床面の構築
④ 内－中周壁間の参道上層床面の構築
⑤ 内周壁内側のステップの付設
⑥ 内周壁内側通廊脇の遺構の増築
⑦ 内周壁内外の大穴の掘削
⑧ 内周壁外面に取り付く遺構の増築＋内周壁東門を封鎖する遺構の構築
⑨ 内周壁周辺を嵩上げする数度におよぶ改変

これらの伽藍改変において，唯一，絶対的な建造時代の指標を備えているのが，中周壁を嵩上げする第二回目の改変で扉枠に刻まれたK.436碑文の10世紀という年代である。碑文に記されるように，この時に寺院は改宗され，ヴァジムカ像などの新たな彫像も安置されたようである。ヴァジムカ像が高い芸術的水準を誇って

いることからも，この時点での建築施工の精度は未だ一定水準を保っていたものと考えられる。これに対して，その後に生じた一連の改変では，仕事の質が大幅に低下している様子が窺える。こうした事実から，アンコール朝の地方拠点として存続していたこの都城は，少なくとも10世紀ごろまでは衛星都市の一つとして重要な位置づけにあったものと推測される。さらに，20世紀初頭に撮影された古写真には寺院内の祠堂にポストアンコール時代の木彫が配されている様子も認められ，アンコール時代が終焉を迎えた後にも，当寺院では時に改変が加えられていたことが推測される。施工精度が著しく低下した増改築の後期の段階は，こうした時代の仕事であったと考えられる。こうした増改築の痕跡の中でも，伽藍の様相を特に大きく変えたのが，中周壁の嵩上げの改変である。現状では，この寺院は伽藍全体をほぼ水平に展開する構成を呈しているが，この改変に考慮すると，建立当初には中周壁は現存遺構よりも約2m低く位置していたことになり，伽藍全体では周囲が一段低く下がる立面構成であった様子が復元される。つまり，伽藍全体は一段高くなった中央テラスと内ー中周壁間の段差とによって，中心に向かって段台状に持ち上げられていた建立当初の様子が推測され，全体としてさほど大きな高低差はないものの，クメール複合寺院の一型式である堂山型の伽藍構成をなしていた可能性が指摘される。

(8) プラサート・サンボー内N10塔西遺構の発掘調査(2008年)。プラサート・サンボー寺院の南東隅の副祠堂にあたるN10塔の西側に近接してこの遺構は位置する。発掘調査の前には，遺構全体が堆積した土砂のマウンドであったが，マウンドの一部に崩壊した煉瓦の壁体があらわれていたために，なんらかの煉瓦造遺構が埋設していることが窺われていた。堆積土砂をクリアランスしたところ，比較的良好な状態で保存されている建物の基壇と壁体の下部が出土した。全体は東西に長い長方形平面で，東側に主室を，西側に前室を構える二室構造となっていた。前室は後補の遺構であることが明らかであり，また主室にも改造の痕跡が認められた。遺構の平面形式と伽藍内における配置から，この遺構はクメール建築において一般的に「経蔵」と呼ばれる遺構であると考えられ，時代的に最も古い「経蔵」建築である可能性が高いことが推測される。調査結果の詳細は後述の雑誌論文②と③に詳しいので参照されたい。

(9) プラサート・サンボー内中央テラスの発掘調査(2008年)。遺跡群内最大の伽藍内の主祠堂を構えるテラスは堆積土砂に埋もれて，その原型が判らないままとなっていた。このテラス上の四隅には小祠堂が配されていたが，これもまた土砂に埋もれていた。本調査ではテラス北西象限にて発掘調査を行い，N4塔と番付されている小祠堂とテラスの上面，輪郭を確認した。小祠堂からは，再利用された建築部位をなす石材彫刻が発見されたため，後世に改変されたか，あるいは増築されたものであることが判明した。また，テラスの平面は複雑な形状をなしており，周囲に排水するための石製の樋が据え付けられていたことが確認された。テラス上面は石敷きで，四方には階段が取り付いているが，いずれも破損が著しく，それらの修理を継続して2009年5月現在進めているところである。

(10) プラサート・サンボー寺院内の各祠堂室内での発掘調査。残存状況の比較的良い煉瓦造祠堂，計８基において発掘調査を実施した。また，発掘調査後には，各祠堂室内の整備を行い，発見された石製の台座については修復工事を実施した。ま

た，煉瓦造祠堂N7塔の前方からは大型の八角形台座が出土し，これについても考古学的調査と，修復工事を実施した。これら一連の調査結果は，後述の報告書⑨に詳しいので参照されたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 下田一太，中川武，新旧の王都をつなぐ古道について－クメール古代都市イーシャナプラの構造に関する研究　その 2，日本建築学会計画系論文，7p.，2009，査読有（掲載決定済み）．
② 下田一太，Chan Vitharong，Seng Kompheak，Him Sophorn，サンボー・プレイ・クック遺跡群プラサート・サンボーの復元研究－2006 シーズンの発掘調査をもとに－，東南アジア考古学，28，33-46，2008，査読有．
③ 下田一太，中川武，初期クメール複合寺院，プラサート・サンボーの改変，日本建築学会計画系論文集，73，1363-1370，2008，査読有．
④ Shimoda Ichita，Frühe Khmer Tempel und die Symbolik bei der Verehrung der naturgeister，Orientierungen，25-49，2007，査読有．
⑤ 下田一太，カンボジア，プレアンコール期のPura（城市）について－考古学的調査資料にもとづく一考察，東南アジア考古学会研究報告，4，41-55，2006，査読無．
⑥ 下田一太，Him Sophorn，Seng Kompeak，Chan Vitharong，Chhum Meng Hong，So Sokuntheary，中川武，サンボー・プレイ・クック遺跡群プラサート・サンボーにおける発掘調査，東南アジア考古学，26，117-145，2006，査読有．

〔学会発表〕（計２件）

⑦ Shimoda Ichita，Previous research works in the ancient city “Isanapura”，Conference on the result of investigation and conservation work in Sambor Prei Kuk，Cambodia，2009.3.
⑧ Shimoda Ichita，Archaeological Vestiges of Pura in Chenla，Angkor-Landscape，City and Temple，conference in The University of Sydney，2006.7.

〔その他〕
工事報告書

⑨ 中川武，下田一太，サンボー・プレイ・クック遺跡群石製台座保存修復工事報告書，文化財保護・芸術研究助成財団，住友財団助成事業，96p.，2008.

事業ホームページ
http://www.hist.arch.waseda.ac.jp/index.php?id=57

６．研究組織
(1)研究代表者

下田　一太（SHIMODA　ICHITA）
早稲田大学・理工学術院総合研究所・非常勤講師
研究者番号：40386719